



「蛇」に関することわざ：  
「蛇」をどう捉えてきたか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 俊臣 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007474">https://doi.org/10.32150/00007474</a>

# 「蛇」に関することわざ

——「蛇」をどう捉えてきたか——

馬場俊臣

## 1 はじめに

「ことわざ」は、古くから言い伝えられてきた、教訓・風刺・真理などを含んだ短い言葉であり、様々な事物に対する人々の見方や捉え方が反映されている。

馬場（2010）（2011）（2012）（2013）では、それぞれ、「牛」「虎」「兎」「龍」に関する日本のことわざを取り上げ、ことわざに反映された牛・虎・兎・龍に対する人々の捉え方の特徴を見た。本稿では、「蛇（へび、じゃ、くちなわ）」<sup>1)</sup>に関することわざを取り上げ、「蛇」に対するどのような捉え方が見られるかを示したい。

本稿で取り上げることわざは、『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』（北村（編）（2012））に基づいている。同書「付録全文データ収録CD-ROM」の「見出しキーワード」検索によれば、計183句のことわざ（俗信・俗説、言葉遊び・しゃれ、慣用語、故事を含む）（「蛇（へび）（じゃ）」181句、「くちなわ」2句）が挙げられており、十二支の動物名を含むことわざの中では「馬」「犬」「牛」「鳥」について5番目に多い。

「巳（み）」は十二支の一つで、年月日、方角、時刻等の呼び名に用いられる。「蛇」は「へびのように人間と特殊な関係をもっている動物は少ない。日本でも古代から、山の神、水の神、雷神としてのへびの信仰が伝えられており（中略）。へびについての昔話や伝説は全国各地に語られている。」（『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジ版）「へび」の項）とされており、「蛇」を含む各地方の俗信・俗説等も多数ある。本稿では、俗信・俗説を除いたことわざを中心に見ていくが、各地方の俗信・俗説等についても、4節で補足的に扱う。

また、「蛇を描いて足を添う（余計なつけたしをする）」「蛇は寸にして大概を知る（一部分によってその全体を推測し得る）」など中国の故事に基づく成語や「蛇の如く聡く鳩の如く素直なれ（人は蛇のように利口で、鳩のように従順でなければならない）」など聖書に由来するとされていることわざなどもあるが、本稿では、中国の故事成語などに基づくことわざなどは取り上げず<sup>2)</sup>、日本のことわざを見ていく。

以下、2節で、蛇に関することわざにおいて注目された蛇の特徴を分類し、ことわざを例示していく<sup>3)</sup>。まず「（1）特徴的な形態」「（2）行動」で蛇の注目されやすい形態や行動を取り上げたことわざを取り上げ、次に「（3）性質・行動」

で蛇がどのような存在としてことわざに表されているかを見ていく。なお、( ) 内に示した解釈は『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』に基づいている。関連する情報も随時補う。

## 2 蛇の特徴

### (1) 特徴的な形態

#### (ア) 足がない〔本来の独自の特徴〕

- ① 足無き蛇足ある者を疑う（自分にないものを備えている者を見ると、かえってそれを愛に思う。）
- ② 蛇に足なし魚に耳なし（蛇には足がなく魚には耳がないが、それぞれ這ったり音を感じたりすることができる。）
- ③ 蛇の足より人の足見よ（蛇に足があるかどうかなど無益なことを論ずるよりも、身近な自分の足もとの事でも考えろ。）
- ④ 蛇は百足の足知らず百足は蛇の腹知らず（他人の心の中は分からない。）
- ⑤ 藪医者薬箱と蛇の足は見た者がいない（蛇の足を見た者がいないように、藪医者薬箱の持っている薬箱の中を覗いて見た者はいない。藪医者は、患者にどんな薬を用いているものやら分かったものではない。）

蛇に足がない理由については、「ヘビの祖先がある期間、半地中生活を強いられたことは確かだろうが、きっかけは、はたして天敵からのがれるためか、環境変化に対応するためか、理由はわからない。しかし彼らが、爬虫類衰退の時代を乗り越えて現在も栄えているのは、やはり半地中生活が好判断だった証拠といえよう。ヘビは、地中の生活で「蛇足」となった四肢を捨て、ふたたび地上にもどったとき、視力を回復し、新しい運動方法を開拓していったのだ。」(松井(1990)：159頁)とのことである。なお、「ヘビの中には、後ろ足の生えているものもいるのです。(中略) 後ろ足に当たる二対の爪のような突起物が、痕跡程度に残っているだけなのですが…。この突起物は、糞や尿と一緒に出てくる総排出腔の両側に見られます。もっとも、こうした後ろ足を持っているのは、ヘビの仲間の中でも原始的な部類に入る、ニシキヘビ科やボア科のような比較的大型のヘビに限られます。」(佐草(1995)：185頁)とのことである。

#### (イ) 体形(長い・曲がっている)〔喩えられるもの〕

- ① 泥鰌の尾に蛇が食い付く（とても長いものたとえ。）
- ② 蛇が蛙を呑んだよう（長いものの途中が、不格好にふくれているようす。）
- ③ 蛇七曲がり曲がりて我が身曲がりたりと思わず（蛇が自分の身の曲がっているのに気づかないように、人も自分の欠点や短所に気がつかないものだ。）
- ④ 蛇の曲がり根性（人の性根が曲がっていること。）
- ⑤ 蛇は竹の筒に入れても真っ直ぐにならぬ（生まれつき根性の曲がっているもの）

は、なおすことが難しい。)

なお、蛇の長さに関しては、「現生ヘビはほとんどが全長1～2メートルで、最大はアミメニシキヘビPython reticulatusの9.9メートル、最小はロイターメクラヘビTyphlina reuteriなどの約10センチメートルである。」(『日本大百科全書(ニッポニカ)』(ジャパンナレッジ版)「ヘビ」の項)とのことである。

#### (ウ) 目が光る・目が小さい〔嘘えられるもの〕

- ① 蛇(へび)(じゃ)の目を灰汁で洗ったよう(光り輝くようす。また、物の正邪善悪などの真相が明白になるようす。)
- ② 蛇の目ほども食うたが得(たとえ蛇の目ほどのわずかな利益でも得たほうがよい。)

蛇の目が光るかどうかに関しては、「蛇の目は光らないが、蛇の目にはマブタがなく、透明な角質で蔽われ、いつも開き放しで、マバタキをしない。いつもじっとにらまれているかんじがする。その畏敬、おそれから、蛇は目が光るとされてきたのである。」(吉野(1979):6頁)とのことである。また、「一般にはヘビの眼はつめたく見えるのだろう。それはまぶたが固着して動かないせいだ。また、ヘビとくにマムシの眼は夜光る、といわれるがそんなことはない。(中略)ヘビの眼は夜行性の種でも光らない。ヘビの眼は下まぶたが上まぶたにくっついて動かず、眼は下まぶたが変化した一枚の透明なうろこでおおわれる。」(松井(1990):115-116頁)とのことである。

#### (エ) 全体的な形態〔不格好〕

- ① 鬼も十八蛇(じゃ)も二十(不器量な娘も年頃になればそれなりに美しく見える。盛りは華やかである。)

#### (2) 行動

##### (ア) 噛みつく〔危険〕

- ① 生殺しの蛇に噛まれる(息の根を止めておかなかった蛇に噛まれる。災いの根元を完全に取り除いておかなかったために、身に害が及ぶこと。)
- ② 花を探(と)って蛇に逢う(美しい花を探しているうちに、蛇に噛まれる。美しいものを追うことは往々にして危険が伴う。)
- ③ 蛇に噛まれて朽ち縄に怖ず(蛇に一度噛まれてからは、蛇に似た腐った縄を見ただけでもおじけづく。一度の失敗にこりて、必要以上に用心深くなる。)

##### (イ) 食べ方(丸呑み・一飲み)〔貪欲〕

- ① くちなわは口の裂くるのを知らず(蛇は貪欲で、自らの口が裂けても、大きなえさを呑みこもうとする。欲が深すぎて、身を滅ぼすこと。)
- ② 蛇の鯨でも食う(なんでも構わずむさぼり食う。また、いかもの食いのたとえ。)
- ③ 蛇(へび)(じゃ)が蚊を呑んだよう(小さすぎて問題にならないこと。また、

腹のたしにならない、こたえないこと。)

- ④ 蛇(じゃ)の口に蠅(一口にも足りないこと。また、ひとたまりもないこと。)

蛇が餌を丸のみできることに関しては、「蛇も水は「飲む」が、蛇はあくまで餌を「呑む」のである。しかし呑みやすい大きさの餌ばかりを選んで捕るわけにはいかないから、蛇は大きな獲物を捕えても、ちゃんと呑み込めるアゴの構造をもっている。上アゴと下アゴとは直接結びつかないで、方骨というものでつながっている。そのためノドがぐっと大きく開く。また下アゴの骨が固定されておらず、バラバラに開くようになっている。大きなものを呑むために、こうして蛇は口を一八〇度近くまで開くことが出来るのである。肋骨もまた哺乳類のように前につながっていないから、皮膚の伸びる分だけは開くようになっている。こういう構造のために、蛇は頭の大きさの一〇倍から一五倍ぐらいのものまで呑めるのである。しかし構造上は呑みこむことが出来ても、消化器が受けつけないときがある。こういうとき蠕動運動を逆行行なうと、呑み込んだものが逆もどりして、吐き出されるわけである。(中略)実は、蛇は、吐き出しの名人なのである。まる呑みする動物は吐き出すことも上手でなければ生存は不可能である。そこで前述のように蠕動運動を逆行行なうのと、口を大きく開けて獲物が歯にひっかかることのないようにすることで、蛇は大きすぎて消化出来ない獲物と、異物とを吐き出して、身の安全を保つのである。」(吉野(1979): 10-11頁)とのことである。

- ⑤ 蛇に遇うた蛙のよう／蛇に睨まれた蛙／蛇に蛙(こわいもの前に出て、身がすくんで動くこともできないようす。とても勝ち目のない相手や大きな威勢のある人物に会った時などのたとえ。)

- ⑥ 蛇の穴へ蛙を投げ込む(わざと残酷なことをする。)

蛇と蛙との関わりに関して、「蛇ににらまれた蛙 圧倒的な強者や苦手とするものを前にして身がすくんでしまうことの譬え。蛙はナメクジ、ナメクジは蛇、蛇は蛙を食うということから、三者が互いに牽制して身動きができない状態を「三竦み」といっている。「蛇に蛙」という言い方もされる。見出しの語句はその中の蛇と蛙の関係についていったもの。見出しの語句の言い回しは明治以前にはみられないが、三竦みの図柄や蛇と蛙との関わりは図は少なくなかった。(中略)「三竦み」図は葛飾北斎なども描いているように江戸期にはよく描かれていた画題のひとつであった。」(時田(2009): 623頁)とのことである。

また、蛙を食べる蛇の種類に関しては、「北海道、本州、四国、九州には、同じナメダ属のアオダイショウ、シマヘビ、ジムグリの3種が同所的に生息している。生活の仕方がそれぞれ異なり、うまくすみわけているのが、分布域の重なっていること理由の1つだろう。アオダイショウは樹上性で主に鳥獣を食べ、ジムグリは半地中性でほぼ小型哺乳類だけを食、シ

マヘビはおもに地表で活動してさまざまな脊椎動物を食べる。(中略) 頻度からいうとシマヘビはカエルを食べることがもっとも多く(とくに幼蛇では食物の大半がカエル)、ついで爬虫類である。おもな食物からすれば、同属の他種とはなく、カエルを主食とするヤマカガシと競合することになる。」(千石他(編)(1996):86頁)とのことである。

#### (ウ) 草藪に隠れている〔予想外など〕

- ① 草を打って蛇に驚く(なにげなくしたことが意外な結果を生じる。)
- ② 藪をつついて蛇を出す／藪を叩いて蛇を出す(する必要のないことをわざわざしたために、災いを受けたり不都合なことになったりする。藪蛇。)
- ③ 藪に蛇なかれ村に事なかれ(藪の中に蛇がいてほしくないように、自分の周囲に何事もなくあってほしい。)

#### (エ) 移動〔不可思議〕

- ① 蛇(じゃ)の道は蛇(へび)／蛇(じゃ)の道は蛇(へび)が知る(一般にはなかなか察知できないことも、その世界に身を置く者はすぐにわかる。同じような仕事や生き方をしてきた者のすることは、見当がつく。)

「蛇(へび)」と「蛇(じゃ)」の違いに関しては、「蛇(じゃ)の道(みち)は蛇(へび) (中略) 音読みの「じゃ」は大きな蛇のことであり、訓読みの「へび」は普通の大きさの蛇のこと。同じ蛇であれば、大きさに違いがあっても、人間にはわからない蛇の通り道は小さな蛇でも分かるというもの。」(時田(2009):325-326頁)とのことである。

- ② 蛇竹に上り百足地に転ぶ(足のない蛇が竹の上のにのぼるのに、足の多いむかでがかえって地をはう。物事が反対なこと。)
- ③ 鬼もけつまずき蛇も川流れ(いかなる名人・達人も時には失敗すること。)

蛇の移動(なぜ早く動けるのか、木に登れるのか、泳げるのかなど)に関しては、「ヘビは腹部に並んだ『腹板』と呼ばれる大きなうろこを、腹部の筋肉を使って前後左右に器用に動かして、動き回っていたのです。」(佐草(1995):185頁)、「ヘビは、ろっ骨と腹板で前へ進む。ヘビの進みかた方は、背骨につながったろっ骨を、前にたおして地面に押しつけ、ろっ骨がまっすぐになるまで体を前に動かすというやり方です。腹板は、ヘビのおなかの部分にある、はばの広いうろこです。筋肉でろっ骨とつながり、ろっ骨の動きにあわせて動く腹板が、キヤタピラのような役目をして、ヘビの体が前に進みます。この進みかた方と、体を左右にくねらす動きをあわせて、かなりのスピードで前進します。(監修・今泉 忠明)」(「ヘビはどうして足がないの、どうして歩けるの」[http://kids2.gakken.jp/box/nazenani/pdf/01\\_doubutu/X1020124.pdf](http://kids2.gakken.jp/box/nazenani/pdf/01_doubutu/X1020124.pdf) より)、「松などのように幹の表面がゴツゴツしている木に登る場合には、この腹板の両側のキールと呼ばれる堅い出っ張りを、幹の凹凸にうまく引っ掛けながら登って行くのです。また、竹などのように表面がツルツルしていてキールで引っ掛けようのな

い幹の場合でも、体を幹に巻き付けて落ちないように締め付けながら、地面を移動する時と同じ要領で腹板を前後に動かしながら登ることができるのです。もっともこちらの本登りのやり方は、あまり幹が細すぎるとできませんが…。(中略)ヘビはこの木登り術を応用して、全く垂直な塀や壁を登ることだってできますから、屋根や塀の隙間などから簡単に住居の中に侵入して、屋根裏に住み着き、ネズミなどを捕食することだってできるわけです。」(佐草(1995):186-187頁)、「更に驚くべき能力として、水面を泳げるということが上(ママ)げられます。まず、ヘビは水に入る前に肺に空気を吸い込んで、体を水面に浮かせます。そして頭を持ち上げて、地面を這い回ると同じ要領で体をくねらせると、かなりのスピードで泳ぐことができるのです。」(佐草(1995):187頁)、「ヘビを神格化したり、神の使いと考える風習は昔から数多くあります。お正月に飾るしめ縄はヘビが枝に体を絡ませている状態を表現したものですし、かがみ餅もとぐろを巻いたヘビをかたどったものだと言います。昔の人には理解できない神秘的な運動能力を持ち、しかも農作物を荒らすネズミを退治してくれるヘビの存在が、神と重なり合ったとしても何の不思議もありません。」(佐草(1995):187頁)とのことである。

#### (オ) その他(水を飲む)

- ① 牛は水を飲んで乳(ち)とし、蛇は水を飲んで毒とす(同じものでも使い方によっては、毒にも薬にもなる。)

### (3) 性質・行動

#### (ア) 執念深い

- ① 女の情けに蛇(へび)(じゃ)が住む(女の情愛は執念深く、深入りすれば恐ろしいものだ。)
- ② 女の根性(ねしょう)は蛇(じゃ)の下地(女の本性には蛇のような執念深さが潜んでいる。)
- ③ 蛇とも成るべき日高川(女の執念は蛇ともなつて川を渡るほどである。女の執念の恐ろしさをたとえていう。道成寺の故事による。)
- ④ 蛇根性(執念深い根性。また、ねじけた性格。)
- ⑤ 蛇と長袖の祟りは怖い(蛇と同様、坊主は執念深い。)
- ⑥ 蛇となつて金を守る(死後まで金銭に執着する。)

蛇の執念深さに関しては、「ヘビに限らず、いったいに爬虫類は執拗で、いったんはじめた行為は物理的に不可能になるまでやめない。いや、やめることができないのだ。」(實吉(1988):51頁)とのことである。

#### (イ) 恐怖の対象(残忍・邪悪・無慈悲)

- ① 鬼か蛇(じゃ)か(残忍な人のたとえ。)
- ② 鬼とも蛇(じゃ)とも思う(相手を鬼か蛇のような無慈悲な人間と思う。)

- ③ 鬼が住むか蛇（じゃ）が住むか（どんな恐ろしいものが住んでいるか分からない。また、人の心の底にはどんな思いがあるか想像がつかない。）
- ④ 鬼が出るか蛇（じゃ）が出るか（次にどんな事が起こるか分からない予測不能で不気味なようす。）
- ⑤ 座頭蛇に驚かず／盲蛇に怖じず（状況や事情がよく分からないために、物おじをしない。）
- ⑥ 蛇（へび）（じゃ）が出そうで蚊も出ぬ（大きなことが起こりそうに見えて、実際は何も起こらない。）
- ⑦ 鎮守の沼にも蛇は棲む（人が拝みにくる神聖な場所にも邪悪な物が巢食っている。悪人はいたる所にいる。）
- ⑧ 蛇の生殺し／くちなわ生殺し（蛇を半死半生にして、殺しも生かしもせずに置くこと。痛めつけてとどめを与えずに放置しておくこと。また、物事に決着をつけず、不徹底のままにしておくこと。）

蛇の恐ろしさに関しては、「一般にへびは性質が温和で、毒へびですら原則として自衛以外に人間を攻撃することがない。多くの種は頸部や胴を膨らませ、尾を激しく振って威嚇する。」（『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジ版）「へび」の項）、「「へび→咬みつく→毒→危険→悪者」という連想を頭のなかで瞬時に行なう人が多いようだ。しかし、この連想は誤解にもとづくものであり、事実をゆがめた誇張以外の何物でもないことを知っておいてもらいたい。（中略）以下ではこの対捕食者行動という意味での防御について述べる。へびの防御の手段は多様である。敵の姿を認めたたたん、シュルシュルとすばやく草のあいだを這って逃げるのも、体の色柄がまわりの環境にとけ込んでうまくカムフラージュされていることを頼りに、まったく動かないでいるのも、防御である。いじくられたジムグリは長い体を団子状に丸めて頭を隠してしまう。気性の荒いシマへびやアカマタは首の部分でS字状に曲げて鎌首をもたげたおなじみの「攻撃」ポーズをすぐとる。しかし、これはあくまで防御のための攻撃である。体の姿勢や身の動かし方をよく観察してみると、獲物を狙うときの攻撃と自分自身の身を守るときの攻撃とが違うことがわかる。（中略）へびやマムシは危険な毒蛇であり、防御のためとはいえ咬みついてくるので要注意である。」（千石他（編）（1996）：90頁）、「山道を歩いていくと、たいていのへびは逃げていってしまうのだが、日光浴をしているマムシは、そのまま動かないことが多い。動かないマムシの斑紋は落ち葉の上などでは見分けにくく、気づかずに近寄ってしまい、咬まれる事故が発生する。マムシは跳躍することができず、またわざわざ近寄ってきて咬むこともなく、人が咬まれるのは不用意に近づくためである。だから、咬まれないためには、こちらが先にマムシを見つけ、近寄らないことである。」（千石他（編）（1996）：101頁）とのことである。



ちなみに、蛇の「日光浴」に関しては、「マムシは普段は夜活動して、ネズミやカエル、トカゲ、鳥などを捕食する。人にかみつくとすることは少ないが、メスが子どもを妊娠している夏には、カルシウムを体内で量産しようと太陽にあたるため、人と遭遇することも多くなる。マムシにかまれるという事故が起きるのもおおよその時期である。」(東京雑学研究会(編著)(2007):619頁)とのことである。

日本の毒蛇に関しては、「わが国のヘビは、コブラ科に属するウミヘビを除けば、七割が無毒ヘビで、残り三割が毒ヘビである。(中略)わが国にも毒ヘビがうじゃうじゃいるように思われるが、広範囲に分布するのは少なく、実際に人命にかかわるものは数種である。」(石島(2006):71頁)とのことである。

生殺しの蛇に関しては、「生殺しのヘビは、ひと思いに殺してしまったよりも、苦痛が長くはげしいので、よけい崇りがあるといわれている。人間の方からいうと、殺そうと半殺しにしようと思えば、かえってヘビの方で崇ることができないが、少しでも悔いる思いがあると、かならず崇られるといわれる。」(實吉(1988):51頁)とのことである。

#### (ウ) 氣迫 (優れた素質)

- ① 蛇(じゃ)は一寸にして人を呑む／蛇(じゃ)は寸にして呑氣あり／蛇(じゃ)は生まれ乍らにして人を呑む氣あり／蛇(じゃ)は生まれ乍らにして牛を呑む氣あり／蛇(じゃ)は一寸にして兆し現わる／蛇(じゃ)は寸にして兆しあり／蛇(じゃ)は一寸にしてその氣を得る／蛇(じゃ)は寸にしてその氣を吐く(蛇(じゃ)は一寸ほどの小さなものでも、すでに人を呑もうとするなどの氣迫がある。すぐれた人物は幼少の頃から抜きでた素質を示す。)
- ② 蛇(じゃ)は一寸よりその形を知り、人は一言にてその志をはからるる／蛇(じゃ)は一寸を出だしてその大小を知り、人は一言を出だしてその長短を知る(蛇(じゃ)は体の一部分を現わしただけでその大小がわかるが、人も一言を聞いただけでその賢愚長短がわかる。)

「蛇(じゃ)」という読み方に関して、「蛇は寸にして……の諺はあくまでジャと読み、大蛇でなくてはならない。大蛇の子だからそこのふつうのヘビ(凡人)よりちがったところがあるのだとされるのである。それと同じく、(中略)〔蛇が出そうで蚊も出ない〕とか、〔蛇が蚊を呑んだよう〕という言葉も、ヘビでなく、ジャと読まねば、意味が通らなくなる。〔鬼が出るか蛇(じゃ)が出るか〕——というスリルを煽る言葉がある。ジャが出そうでかも出ないというのはこれと対置されるような言葉で、何か大へんなこと、おそろしいことが、今にも起こりそうに見えて、実はなんにも起こらなかったというとき使う。」(實吉(1988):44-45頁)とのことである。

#### (4) その他

- ① 灰吹きから蛇（じゃ）（へび）が出る（意外な所から意外な物が出る。ありえない。また、途方もない。）
- ② 蛇も一生、蛞蝓（なめくじ）も一生（人の一生は賢愚の差や境遇の違いはあっても、一生に変わりはない。）
- ③ 思い掛け無き蛇（じゃ）の汁を吸う（意外なことに会う。）
- ④ 歌の返しせぬ者は蛇になる（和歌を詠みかけられて返歌をしないような者は、来世には蛇に生まれ変わる。）

### 3 各地の俗信・俗説等

蛇に関する各地方の俗信・俗説・諺等も多数ある<sup>4)</sup>。本節では、それらを「吉(兆)」 「凶(兆)」 「禁忌」 「蛇除け等」 に便宜的に分類し例示していく。なお、( ) 内に『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』に基づいて地域等<sup>5)</sup>を示す。関連する情報も随時補う。

#### (1) 吉(兆)

##### (ア) 蛇の夢

蛇の夢を見たら三日言わぬと果報あたる(花巻) / 蛇の夢を見ると縁起が良い(秋田・栃木・静岡・広島・長崎) / 蛇の夢を見ると金を儲ける(岩手) / 蛇が懐へ入った夢はお金が入る(播州赤穂) / 蛇に巻かれている夢は良い(播州赤穂) / 蛇が川を遡る夢はよい事がある(播州赤穂) / 蛇の夢を見ると帯があたる(手に入るの意)(諺語大辞典)

##### (イ) 蛇の抜け殻(脱皮)、蛇の皮

財布に蛇の抜け殻を入れておくと金が溜まる(岐阜・三重・広島)(播州赤穂)(日向) / 蛇の抜け殻を箆筒に入れておくと着物がたくさんできる(播州赤穂) / 蛇の抜け殻を懐に入れると籤に強い(青森県五戸) / 蝦蟇口の中へ蛇の皮を入れておくと金持ちになる(富山) / 蛇の衣(きぬ) 脱ぐを見れば福あり(諺語大辞典)

蛇の脱皮に関しては、「ヘビの皮膚は他の爬虫類と同じく、二つの層からなっている。表皮(上皮)は角質のケラチンからできており、ケラチン層が部分的に部厚くなったのが、うろこだ。表皮の薄い部分はうろこをつなぐ役目をし、これらが折りたたまれて重なりあい、規則正しく配列される。魚のうろこのようにバラバラにできるのではなく、一枚の連続した上皮なのだ。(中略)ヘビの表皮のケラチン層は成長とともに周期的にはがれ、新しい層にかわる。脱皮だ。ほかの爬虫類では表皮はバラバラにはがれるが、ヘビでは全身が一枚の脱皮殻となるため、野外でもよく目につく。(中略)ヘビは脱皮がはじまると、木の枝や樹皮に吻部をこすりつけて古い表皮をやぶり、障害物に引っかけながらうら返しに脱皮してゆく。そのままゆっくり前進するとスムーズにはがれてゆき、脱皮殻がそっくり残る。脱

皮は成長にともなって一年の活動期に数回行なわれ、幼蛇ほど回数が多い。」(松井(1990):122-123頁)とのことである。

#### (ウ) 蛇を見る、蛇の何らかの行動や部分を見るなど

外出して蛇三匹見て帰れば家に馳走あり(筑前)／蛇を三匹見ると夜は御馳走がある(播州赤穂)／蛇の上を見れば出世する(諺語大辞典)／蛇がとぐろを巻いているのを見るとよい事がある(播州赤穂)／蛇の交尾を見れば吉(南総)／蛇の番うを見れば子を孕む(諺語大辞典)／蛇の卵からかえる所を見ると金銭上の利益がある(宇都宮)／蛇の足を見ると長者になる(諺語大辞典)／尾の切れた蛇は神様のお使い(香川)／蛇の尾を切って埋めておくで銭を拾う(日向)／死んだ蛇を見たら土に埋めると歯が丈夫になる(鳥取)／蛇は弁天の使い(神奈川)

死んだ蛇の腹を上向けにしておけば雨が降る(福岡)(日向)／蛇が出ると近いうちに雨が降る(上総)／蛇が下腹を見せると雨が近い(四日市)／蛇の腹かえせば雨降る(青森)／蛇が木登りをしていると雨(諺語大辞典)

家の中に蛇が入ると暮らし向きがよくなる(岩手)(播州赤穂)／蛇が家に入ると金持ちになる(青森)(宇都宮)／蛇を飼えば金持ちになる(諺語大辞典)

蛇と人家とのつながりに関しては、「日本本土のヘビとしてはアオダイショウはもっとも樹上性傾向が強く、木によく登り、樹洞などにすみつく。人家、とりわけ木造住宅はアオダイショウにとっては、生息に適した大木と同じである。屋根裏は樹洞に当たり、休息の場を与える。そこにいる家ネズミや、戸袋や煙突・屋根瓦のあいだなどに巣をつくるスズメは餌となる。(中略)古くは家の主とか守り神として大事にされる美風のおかげもあり、アオダイショウは、ネズミを退治しつつ人間と共存していたのだ。」(千石他(編)(1996):84頁)とのことである。

## (2) 凶(兆)

### (ア) 蛇の夢

蛇の夢を見れば験が悪い(四日市)／蛇の夢を見ると氏神様にお参りしなければならない(長野)／蛇が土の中へ入る夢は病気になる(播州赤穂)

### (イ) 蛇の骨を踏む、蛇を殺す、指差すなど

蛇の骨を踏むと足が腐る(神奈川)／蛇の骨を踏めば石豆ができる(奈良)／蛇を殺すと祟る(神奈川)／倉の蛇を殺すと貧乏になる(宮城)／屋敷蛇を殺すとその家は衰える(佐渡)／死んだ蛇を指差しすれば指が腐る(奈良)／蛇を指差せば指が腐る(福岡)(秋田)(宇都宮)(大和)／蛇の太さ長さを指で真似たら吹いておかぬと腐る(諺語大辞典)

### (ウ) 川・海で蛇を見るなど

川漁の時に蛇を見ると魚が釣れなくなる(南会津)／沖に行つて蛇の話をするれば漁なし(青森)(香川)／船に乗って蛇の話をする船の神様が嫌う(日向)／猿、蛇、引くなどの言葉を聞けば不漁となる(宮城)

水の近くで活動するヘビに関しては、「マムシは山林やその周辺の田畑に多く、とりわけ水に近いところを好む。」(千石他(編)(1996):101頁)、  
「ヒバカリは、水辺、水田、林内から時には人家の周辺まで、幅広い環境に生息するヘビだが、一般的にはあまり知られていない。とくに関東から東北にかけては、ジムグリと混同されることが多い。(中略)本州にすむ8種のへびのうち、水中で見つかる頻度をもっとも高いのはヒバカリで、餌動物も小型のカエルやオタマジャクシ、ドジョウなどの小型の魚類など、水辺や水中で捕らえられるものが多い。しかし、ヒバカリは水中と同様、陸上でもよく活動しており、小型のカエルに加え、ミミズも餌にしている。  
(中略)性質はおとなしく、体が小さいこともあり、ふつう容易に手に取ることができる。しかし、驚いたときとか、逃げようとして追いつめられたときなど、かなり激しい威嚇行動を行なう。首をS字状に曲げ、頭部を高く浮かせる。この姿勢から、実際に咬みつくわけではないが、くりかえし頭部を相手に向けて伸ばし、攻撃するような動きを見せる。このときに「シュツ」という小さな音を立てることもある。ヒバカリという名は、「咬まれるとその日ばかりの命」ということに由来するとされるが、このような威嚇行動が、毒蛇を連想させたためであろう。」(千石他(編)(1996):93頁)とのことである。

### (エ) 蛇を見る、蛇の何らかの行動や部分を見るなど

蛇が冬籠りをしているところを見ると蛇が出てくるまで盲になる(播州)／春先に蛇を見るとその年が蛇のように遅い(佐渡)(豊前宇佐)／蛇が来ると味噌が腐る(佐渡)／味噌桶の下を蛇が這うと味噌は廃れる(花巻)／蛇が家の下に生き埋めになると不吉なことがある(播州赤穂)／蛇が道を横切るといけない(宮崎)／蛇に道切りをされるとなにか持ち物を落とす(奈良)／屋敷内へ山椒の木を植えてその木に蛇が登ったら人を食う蛇になる(愛媛)

### (3) 禁忌(蛇になる、蛇が出るなど)

大神宮のお札を踏めば蛇に噛まれる(諺語大辞典)／帯で人を叩けば蛇になる(諺語大辞典)／女が釣り鐘の下へ入ると蛇(じゃ)になる(諺語大辞典)／鏡の下をのぞけば蛇になる(岩手)／櫛の歯を銜えると蛇(じゃ)になる(諺語大辞典)／夜、口笛を吹くと蛇が出る(岩手)(福岡)／夜、笛を吹くと枕元へ蛇が来る(名古屋)(土佐)／夜、酸漿を鳴らすと蛇が出る(宇都宮)(常陸鹿島)(南総)／八畳の間へ一人寝れば蛇になる(南総)／娘一人で寝ると大蛇になる(大分)／家を回ると蛇になる(大和)／人の回りを回ると蛇になる(葬式のとき棺を荷って庭を回る風習があるため不吉とされる)(福岡)／妬み深き者は蛇になる(諺語大辞典)／五月節供に菖蒲湯に入らないと蛇の子を生む(福島)／蛇の穴へ女が小便すると魅入られる(諺語大辞典)

#### (4) 蛇除け等

紺の足袋を履くと蛇に喰われない(佐渡) / 正月十五日のとんどの灰を家の回りにまいておくと蛇が出ない(播州赤穂) / 蛇は楠が嫌い(蛇の好物である味噌のそばに楠を置いておくと蛇が寄り付かないということ)(佐渡) / 唐辛子をくゆらすと蛇が逃げる(宇都宮) / 初雷を聞きながら初雷と筆で書いたものを家の中に貼っておくと、家の中に蛇が入ってこない(福岡) / 蛇が出た時は十字を書いて通れば蛇に噛まれない(福岡) / 蛇に噛まれたら、殺してその肉を塗り付けると完治する(佐渡) / 蛇に道を横切られたときは三步退け(諺語大辞典)

蛇を殺さば頭を砕け / 蛇を殺した竹は唾を三度かけて棄てよ(日向) / 蛇を殺しても首切るな(会津)

## 4 終わりに

「ヘビのように人間と特殊な関係をもっている動物は少ない」「日本でも古代から、山の神、水の神、雷神としてのヘビの信仰が伝えられており」「ヘビについての昔話や伝説は全国各地に語られている」(『日本大百科全書(ニッポニカ)』(ジャパンナレッジ版)「へび」の項)とあるように、蛇は極めて身近な動物であった。ことわざに見られる蛇は、足がなく長く曲がった体形などの特徴的な形態に注目したもの、噛みつくことや食欲に丸呑みにする食べ方に注目したもの、執念深さや恐怖の対象などの性質などに注目したものなどさまざまな捉え方をされてきた。また、各地の俗信・俗説等では、蛇の夢や脱皮などを吉兆と捉える見方とともに、逆に蛇の夢や蛇を見ること自体などを凶兆と捉える見方が各地にみられた。さらに何らかの禁忌を示すために「蛇になる」「蛇が出る」ことが利用されてもいた。

蛇は世界各地に生息しており、『世界ことわざ大事典』(柴田他(編)(1995))によると、他言語にも「蛇」のことわざが多数あり、日本での捉え方と類似のことわざも多く見られる。「足がない」「長い」といった特徴的な形態に注目したことわざとしては、たとえば「蛇は足のことを口にしない(ずる賢い人間は自分の弱みを決して明らかにせず、上手に隠す。)(マケドニア)、「長いものは蛇になる(議論もおしゃべりも、長すぎると蛇のように、ぐにゃぐにゃして得体がしれなくなる。)(イタリア)などがある。また、「噛みつく」という行動に注目したことわざのうち「蛇に咬まれて朽ち繩に怖ず」と同じ意味を表すことわざは、「蛇に咬まれた者は繩に驚く(アフガニスタン)、「蛇に噛まれたものは繩におびえる(パキスタン)、「蛇に噛まれた人は白黒の綱に恐れる(イラン)、「蛇に噛まれたことのある人は蚯蚓をも恐れる(セルビア)、「蛇がお前を噛むと、お前はトカゲからさえ逃げ出す(ジャマイカ)、「私は蛇に噛まれたので、虫を見ても恐ろしい(スリナム(ギアナ))など多くある。さらに、恐怖の対象として捉えたことわざも、「クサリヘビを懐にかかえる(危険な人物を内にかかえている。)(ビルマ)、「蛇の口に手を入れるな(君子危うきに近寄らず)。分別、慎重さを教えている。)(フィリピン)、「寝ている蛇

の尾をふむな（よけいな危険を冒すな。）」（カザフスタン）（ウズベキスタン）、「眠っている蛇を踏むな（よけいな危険を冒すな。）」（ルーマニア）、「蛇を殺すならその頭を打たなければならない（悪はその根源を絶たなければ減びない。）」（クロアチア）など多くある。このように、日本のことわざの捉え方に類似する世界のことわざも多い。

以上、本稿では、「蛇」に関することわざを示しながら、「蛇」に対する見方や捉え方の特徴を見た。

## 注

- 1 北村（編）（2012）『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』「付録全文データ収録 CD-ROM」の「見出しキーワード」検索による「巳（み）」の項の19句はいずれも「巳年」「巳の日」「巳の刻」の意で使われている。本稿では、「蛇」（へび、じゃ、くちなわ）を含む句（主にことわざ）を対象とする。
- 2 『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』に漢籍類及び聖書の出典が示されていない表現を日本のことわざとみなす（ただし、俗信・俗説等は除く）。
- 3 例示したことわざの中の「蛇」を「へび」と読む場合は特に読みを付していない。「じゃ」と読む場合のみ読みを付した。
- 4 『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』の解説文に「〈俗〉」（俗信・俗説）が付されている句及び出典が方言集類である句を対象としている。
- 5 （ ）内に「諺語大辞典」とある句は、「〈俗〉」（俗信・俗説）表示があり、出典が『諺語大辞典』（藤井乙男著、1910年刊）とされている句である。

## 参考文献

- 石島芳郎（2006）『十二支の動物たち』東京農業大学出版会
- 北村孝一（編）（2012）『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』小学館
- 佐草一優（1995）『ウソ・ホント？ 動物ことわざ事典』ビジネス社
- 實吉達郎（1988）『動物故事物語 上』河出書房新社
- 柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子（編）（1995）『世界ことわざ大事典』大修館書店
- 千石正一他（編）（1996）『日本動物大百科 第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類』平凡社
- 東京雑学研究会（編著）（2007）『雑学大全Part 2』東京書籍
- 時田昌瑞（2009）『図説ことわざ事典』東京書籍
- 馬場俊臣（2010）「『牛』に関することわざ——牛の何をどう捉えてきたか——」『札幌国語研究』15（北海道教育大学国語国文学会・札幌）
- 馬場俊臣（2011）「『虎』に関することわざ類——虎をどう捉えてきたか——」『札幌国語研究』16（北海道教育大学国語国文学会・札幌）
- 馬場俊臣（2012）「『兔』に関することわざ——兔をどう捉えてきたか——」『札幌国語研究』17（北海道教育大学国語国文学会・札幌）

馬場俊臣（2013）「「龍」に関することわざ——龍をどう捉えてきたか——」『札幌  
国語研究』18（北海道教育大学国語国文学会・札幌）  
松井孝爾（1990）『図説・なぜへびには足がないか』講談社  
吉野裕子（1979）『蛇 日本のおとこ信仰』法政大学出版局  
『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館（ジャパンナレッジ版）

付記 本稿は、平成25年度北海道教育大学札幌校公開講座「文学に見られる動物たち（Ⅶ）——へび—— 第4回 日本語とへび」（平成25年8月31日）の講演資料の一部に修正を加えたものである。